

## ● 制作

# 暮らしに息づく森の時間 ～林床の導入による自然との関係再編～

小島 由聖 園芸学部 緑地環境学科 環境造園学プログラム (主指導教員: 章 俊華)  
KOJIMA Yusei

### 1. 研究の背景と目的

江戸時代の暮らしでは、住まいと自然が地続きであり、生活そのものが自然の循環と結びついていた。近代のニュータウンや団地では、職住分離と計画的開発によって自然との関係が希薄化した。その結果として、自然は公園や緑地として“機能化”され、生活から距離が生まれた。

本計画では、その分断を否定するのではなく、自然を暮らしに引き込み、重ねることで現代的な地続きの暮らし方を再編し、新しい人と自然の関係問い直す。

### 2. 対象地の調査

今回は、福島県いわき市のいわきニュータウンを対象地とした。

昭和 38 年(1963)、いわき地方が「常磐・郡山地区」が新産業都市に指定され、工業化の進行とこれに伴う住宅地の確保が必至となった。さらに昭和 41 年(1966)、近隣市との合併によりいわき市が誕生した。「いわき都市整備基本計画」では、いわき市の「核」となる新しいシンボルゾーンをすることによって、合併都市の宿命である都市の効率の悪さを是正し、新しい都市構造の核を形成することを目的として、いわきニュータウンの構想が始まった。

ニュータウン計画は、単に増加する住宅需要に対する宅地供給のみならず、将来の都市構造に影響を及ぼす企画として、新しい魅力であると視覚の形成を目標とした。

いわきニュータウンに求められた当時の役割は、以下の点であった。

- ① 住宅需要に対応する良好な住宅地の供給、いわき地域郊外防止計画によって移転される住宅の移転先の確保
- ② いわき市に不足している「文化・教育・レクリエーション」の機能を中心的な都市機能とする新たな都市核の形成
- ③ 平、小名浜、湯本、内郷等の異なる都市機能を持つ既成都市核との機能分担による多核都市パターンの形成  
従来 (S51 年代) の住宅団地やニュータウンでは、その地区住民のためのものだけ、という閉鎖的なものとなりがちであり、周辺地域に馴染まない例が多く見られた。そこで、いわきニュータウンは周辺地域に対して「開かれたニュータウン」とすることを基本にした。このため、ニュータウン内にすでに予定されていた「いわき公園」との一体的な計画によ

り、大勢の人々が集まり、賑わいを持つような、文字通りのタウンセンターを目標とした。

いわきニュータウンの現状から、以下の点がわかった。

- ① 現在でも住宅地開発が行われているが、人口が計画人口に満たず、少子高齢化による人口減少が起きている
- ② 文化機能を持つ施設が、「暮らしの伝承郷」のみであり、ニュータウンとしての文化機能の要素が弱い
- ③ ニュータウン内には中央台第一・第二団地があり、現状建設物の老朽化や空き家により現状の衰退が進行している

中央台第二団地は、暮らしの伝承郷・いわき公園と隣接しており、近代の団地同様、自然と人のつながりは分断された世界線となっている。

### 3. 設計敷地

本計画では、文化拠点である暮らしの伝承郷といわき公園に隣接する中央台第二団地を敷地に選定し、自然と分断された生活構造を問い直し、文化機能の拡充を図る。森から街へと、“森がにじみ出る”ような空間構成によって、自然と人の生活が呼吸を共有する場の創出を目指す。

### 4. 提案の方向性

今回の提案では、団地の記憶と森の時間を重ねることで、分断された生活構造を日常の動線で編み直し、自然と人の暮らしが呼吸を共有する空間を作り出す。

設計のコンセプトとして、森の林床空間がもたらす時間と呼吸を共有する風景を設計手法とする。林床は単なる雰囲気ではなく、“時間を設計する装置”として扱う。設計では、自然繊維のプロセスを組み込むことで、森の引き込みを周辺環境に即してゾーニングする。

### 参考文献

- 1) いわきニュータウン基本構想策定調査報告書 昭和 51 年 3 月 地域振興整備公団-1976
- 2) 中央台公民館市民講座「いわき市におけるいわきニュータウンの立ち位置」のお話し -小宅幸一-
- 3) いわきニュータウンポータルサイト
- 4) 雑草社会がつくる 日本らしい自然
- 5) 令和 2 年度国勢調査-いわきニュータウン-人口-

